都道府県別賞一等

祖父が残してくれたもの

鳥取県　鳥取大学附属中学校　三学年

寺岡　優希

昨年の秋、祖父が亡くなった。八十二歳だった。

祖父は若い頃、公務員として働いていた。その頃は大きな病気やケガをすることがほとんどなく、病院に通うことさえなかったそうだ。

退職後は毎日のように散歩へ出かけ、一日に何時間も歩くことを楽しみにしていた。「そんなに散歩が好きなら、犬を飼って一緒に散歩すればいいのに。」と、祖母が提案しても、祖父は気ままにあちこちを見て回るのが好きだったようだ。

しかし、数年前、散歩の途中で転んで入院したことをきっかけに、その後は病気で入退院を繰り返すようになった。

日本人男性の平均寿命は八十一歳前後といわれている。しかし、健康に自分らしく生活できる期間である健康寿命は、それより短い。元気に散歩を楽しんでいた祖父が少しずつ歩けなくなり、入退院を繰り返す姿を見て、健康で過ごせる毎日は当たり前ではないのだと感じた。

祖父が亡くなった後、家族はいろいろな手続きをすることになった。手続きがひと段落したところで祖母が話していた。「分からないことばかりで、何度も役所に行ったし、あちこちに電話もした。必要な書類もたくさんあって、もし一人だったら本当に大変だったわ。手伝ってくれる人がいて良かった。」

僕が祖母の話の中で特に印象に残っているのは、生命保険と銀行の手続きの違いだった。

生命保険は、必要な手続きをすると、受取人である祖母に比較的早く支払われた。一方、銀行口座は、祖父が亡くなったことが分かると凍結され、解約の手続きにはそれぞれの銀行が指示した書類をそろえる必要があり、完了するまでに数カ月かかった。

保険金が比較的早く支払われたことで、葬儀やその後の生活費を心配しすぎずに済み、祖母は「本当に助かった。」とも話していた。

今回の経験を通して、病気やケガなど、もしもの時に備えることは自分のためだけではなく、大切な人を支えることでもあると知った。

祖父が残してくれたものは、生命保険だけではなかった。健康に生活すること、家族を思いやること、将来に備えることの大切さだった。僕も祖父が大切にしていたことを忘れず、家族との時間を大切にしていきたい。